富山の関東・東北移民と北海道移民

富山県郷土史会
常任理事　前　田　英　雄

関東・東北移民は江戸時代後期の開拓移民で，主として浄土真宗門徒の人々が真宗寺院の手引きで移民したという特異なケースである。北海道移民は明治政府の施策に基づくもので，明治30年代には富山県民の移住者数が全国一位を示めるという盛況だった。その背景は富山県の農民の極端な貧困という状況があった。

1．越中真宗門徒の関東・東北移民

越中（富山県）は親鸞上人の布教以来，「真宗王国であった。宗教法人のうち仏教系は1,696寺ある（平成5年＝1993）。そのうち浄土真宗は1,193寺で7割が浄土真宗の寺院である。寺院総数は滋賀県，大阪府，新潟県に次ぐが，割合ではそれらの府県をしのぐ。

浄土真宗門徒で越中（加賀）から関東・東北地方に移住した農民は，江戸時代後半真宗僧侶の手引きによって移住し移民集落をつくった。

寛政5年（1793）常陸（ひたち）国（現茨城県）笠間藩主牧野貞喜の意を受けた，浄土真宗西念寺の住職良水はひそかに越中（加賀）に人を送り，移民を募集した。当時関東は堕胎（だたい）・間引[1]が蔓延（まんえん）し，江戸への出稼ぎと天明の飢饉で人口が激減しており，田畑の荒廃も甚しかった。一方越中（加賀）は宗教心が篤く生児を間引くようなことがなかったので，人口が増え続け，一戸当りの土地保有面積が減り，飢饉のたびに年貢を払えない走百姓（はしり）[2]が続出していた。

このため寛政6年（1794）以降，良水の招きに応じた農民が続々と笠間藩に移住し，西念寺[3]を旦那寺として開墾に従事した。

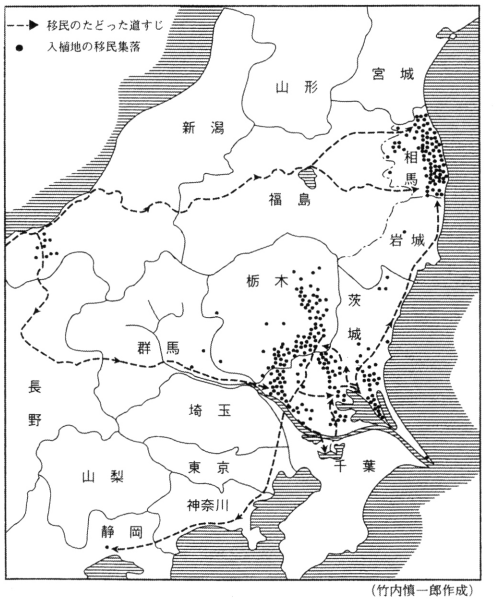
1）堕胎・間引　胎児を人為的に排出したり，子どもを養育しがたいとき殺すこと

2）走百姓　所在地を逃亡した百姓で厳しく取締り死罪になった。

写真1．西念寺

3）西念寺　茨城県笠間市にあり，稲田御坊とよんだ。親鸞がここに20年間滞在して東国教化の拠点となった。

図1．北陸門徒の経路と移住地



（竹内慎一郎作成）

農民募集の条件は，農具代4両を支給し10ヵ年賦で返済，年貢は初年度免除，種籾（たねもみ），夫食（ぶじき）[4]雑穀は現物または代金で貸し，一割の利息で年末に返済するというものであった。

これによって笠間藩への移住戸数は明治維新までに450戸におよんだといわれる。笠間藩の成功に刺戟されて，近隣の水戸藩・穴戸藩（現茨城県内），下野国（しもつけのくに）（現栃木県）の谷田部藩・鳥山藩，磐城国（福島県東部）相馬藩なども真宗移民を受け入れて領内の農民人口の増加を図った。幕末にはその数およそ1,300戸に及んだ。その数はほかの土地を合算すると数千戸ともいわれ，一説による約460か所，約1万戸に達するともいわれる。

移住した農民は，強い信仰心とたゆまない勤勉さと，すぐれた農業技術とによって持高を増やして，この地方の中堅自作農としての地位を築いていった。江戸という大消費地に近い関東農民は，商品経済や都市的な消費生活の影響を受けており，入百姓たちの異常ともいえるほどの勤勉さとはかなり異質の気風を持っていた。また親鸞がこの地を離れてから真宗が衰えてほかの宗派が多くなっていた。このため真宗の宗派に固まっている入百姓たちは，現地の農民から敬遠され，（よそもの）として疎外されることもあったので，入百姓だけで一つの村落をつくっている場合もあり，故郷とも絶縁状態で自からのルーツも不明な人が多い。彼らは，どんなにたたかれても，踏みにじられても故郷を捨ててきた以上，戻ることはできないので，浄土真宗の強い信仰心とたゆみない勤勉さで必死に働き続けた。しかし故郷の風習の散居村を築いている人たちもいる。関東への走百姓を知った加賀藩が，引き戻しにくるという噂が広まり，西念寺の住職良水は責任を一身に負って自刃して果てたといわれる。加賀藩からの引き戻しは行われなかった。

2．新天地を求めて北海道移民

（1）明治政府の北海道開拓移民政策

北海道開拓移住の歴史はさほど古くなく，明治維新（1868）以降に始まった。明治元年（1868）岩倉具視の「蝦夷（えぞ）地開拓建議書」によると，開拓の条件として移民の必要と，漁業・農業・林業などの産業開発と経済的発展をめざすことを主としている。さらにロシアの南下に対する軍事的防衛を目標としていた。

明治2年（1869）初めて開拓使を置き，蝦夷の名称を「北海道」と改めた。当時の人口はアイヌ2万人和人約10万人という過疎地であったが，今日（平成2年1990）では564万4千人余を数える驚異的な発展を遂げた。開拓使は10年計画を建て，アメリカから農商務長官のケプロンやクラークなどのお雇い外国人を招き，道路・港湾の整備に着手した。また産業の基本たる農業は，外来品種と欧米農法を積極的に導入しようとした。また炭鉱の開発や各種官営工場も設置したが，一般からの開拓移住の応募がはかばかしく進まなかった。

（2）屯田兵制度による移住

明治7年（1874）開拓次官黒田清隆の建白により「屯田（とんでん）兵制度」が決定した。北辺防備と開拓をかね廃藩置県による失業武士の授産・救済策として実施された。明治8年（1875）最初の屯田兵村が琴似（ことに）（札幌市）に設置され，198戸，965人が入った。明治23年（1890）応募資格を士族から平民に拡大し，士族屯田から平民屯田へ転換した。この制度は以後25年間継続して第七師団に吸収された。この間入植した屯田兵村37か村屯田兵総戸数7,337戸，家族人員39,911人で，開墾総実績は20,382町歩になった。

全国的応募者数は石川県が第一位で404戸，2,303人であった。加賀藩という大藩は失業武士も日本一多く，失業救済に旧藩主と県は勧誘指導に力を入れたからである。

3．富山県からの移住の推移

（1）屯田兵として入植

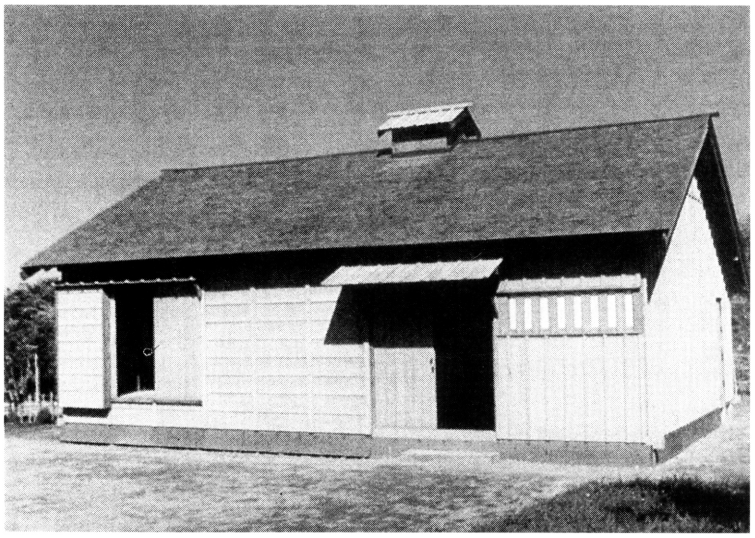
富山県からは総数167戸，1,112人で全国的に13位であった（北海道移民政策史）。町村別の応募者は一部の本にしか記載がなく，平村では明治28年（1895）～30年（1897）の3年間に36戸，227人を送り出しているのが最も多い。

最初の応募は明治16年（1883）ごろに入植した西砺波郡水島村（現小矢部市）出身者であった。入植地では「納内（おさむない）屯田兵村（深川市）」に明治28年（1895）12人，明治29年（1896）8人参加して

4）農民の食糧米をいうが，藩が農民の耕作仕入れのための貸米もいう

写真2．旧納内屯田兵屋

●深川市納内町6の1　●17.99坪（59.48m²）
●明治28年（1895）　●木造平屋建



いる。年齢は18歳～25歳で大半は20歳前後であった。

（2）富山県からの開拓移住者

本県からの最初の移住者は，明治8年（1875）ころ，西砺波郡鷹栖村の人で次いで翌年五筒山の下梨村（西砺市）からの人であった。

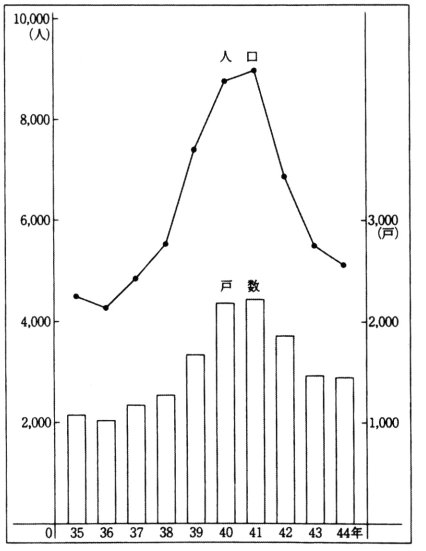
「北海道移民政策史」によると，明治15年（1882）～昭和10年（1935）での54年間における，全国からの移住総戸数は71万7,424戸，富山県からは5万3,850戸と記されている。富山・新潟・石川・福井の4県分を合わせると，21万5,958戸を数え，全国移住戸数の約30%となり，富山県は7.5%を占めている。このように北陸地方の人々が北海道開拓のために大きく寄与した。表1の年代別の移住人口順位にみられるように富山・石川の移住者が際立っている。特に富山県は明治35年（1902）から44年（1911）までの明治末期10年間に移住者が激増した。

表1．北海道移住者府県別人口の順位

明治19～24	25～29	30～34	35～39	40～44	大1～5	6～10
①青森	青森	石川	富山	富山	宮城	宮城
②新潟	石川	富山	新潟	宮城	青森	秋田
③石川	新潟	新潟	石川	新潟	秋田	青森
④秋田	秋田	青森	青森	青森	新潟	新潟
⑤福井	富山	福井	秋田	秋田	富山	山形
⑥山形	福井	秋田	宮城	石川	福島	福島
⑦岩手	岩手	山形	福井	福島	岩手	岩手
⑧奈良	徳島	岩手	岩手	山形	山形	富山
⑨徳島	香川	宮城	山形	岩手	石川	石川
⑩山口	山形	徳島	福島	福井	福井	岐阜
⑪富山	宮城	香川	徳島	岐阜	岐阜	東京
⑫東京	広島	岐阜	岐阜	徳島	東京	福井
⑬鳥取	兵庫	福島	香川	香川	徳島	徳島
⑭兵庫	愛知	愛知	東京	東京	愛媛	香川
⑮福岡	東京	鳥取	鳥取	愛媛	香川	愛媛
⑯宮城	鳥取	東京	愛媛	広島	広島	広島

（『新北海道史』）

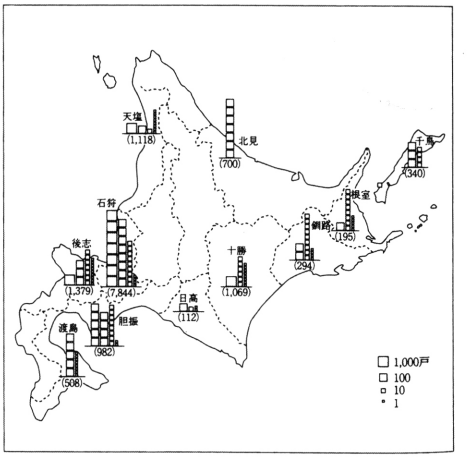
図2．富山県からの北海道移住の戸数（明治35～44年）



日露戦争後の明治40・41年にピークを描いて山形の推移を示している。以後，大正前期に1200戸前後の高原を描いて緩やかに減少していく。

図3．富山県からの北海道移住者の分布（明治38～大正2年）

札幌のある石狩国が最も多い。



この北海道移住の全般的要因についてみよう。

（1）明治の地租負担額の増加による寄生地主制の展開によって，中小農民は土地を喪失し小作農民層に没落した。北陸地方の小作地率は山陰・四国地方に次ぐ高率であった。富山県は明治中期から明治末期・大正まで50％を下ることがなかった。弱体化した小作農たちがおのずから，自作農を目的とする北海道移住につながった。

（2）明治30～40年間の富山県からの移住が最も多かった時期は，日清・日露戦争後の不景気に加え，県下各河川の大洪水による田畑の被害と，32年・40年の“うんか”の大発生による被害が甚大で凶作となり米価暴騰がもたらされ，こうした年に移住者は1万人にも達した。

（3）個別町村の例 ― 五箇山平村の移住要因

北海道移住の要因は地域によってさまざまであった。五箇山三か村（平・上平・利賀）のように山間僻陬（へきすう）のところでは他と異なる要因があった。

1．耕地が乏しく，山里における貧窮が基本にあった。

2．加賀藩の庇護（ひご）による塩硝[5]，和紙の生産が開国でチリ硝石，洋紙にかわり生産を停止した。

3．判方（はんかた）[6]からの借金が累積し，畑・山林・宅地を奪（うば）われた人々が脱出した。

藩政時代の藩の庇護の許に生産した塩硝は，明治維新の開港によって安価なチリ硝石が輸入され，非近代的生産は壊滅した。和紙についても同様なことが起きた。また判方商人によって換金商品が担保になって買いたたかれ，高い生産物質を購入したり，借金をしたりしなければならなかった。

封建時代の生産方式や流通経済のゆがみから生活基盤を失った山里の人々の苦しみが背景となった。

5）火薬の原料。畑土と動物のふん尿，山草を混入ふ蝕させ，硝酸塩からとりだす。

6）判方。生糸，和紙を担保に山麓の商人から借金して，生活物資を仕入れたり，当地は金納年貢でその金を融通する商人。

（4）開拓地発展の功労者　沼田喜三郎

北海道移民に共通しているのは，故郷を去ってきた不退転の堅い決意と東西両本願寺門徒の連帯感だといわれている。そしてねばり強い越中魂がこれをささえた。

明治33年（1900）入善町小摺戸（ずりと）から移民した約50人は

「業成サザレバ死ストモ帰ラズ」

の熾を立て渡道した。この熾は入植した上川郡東鷹栖寺に大切に保存されている。

しかし一方では開拓事業を企業化して，農業方法も大規模機械化して成功したのが，小矢部市出身の沼田喜三郎であった。浄土真宗大谷派東本願寺法主（ほっす）大谷光瑩の依頼をうけ，「開墾委託株式会社」を明治27年（1894）に設立した。彼が手掛け

写真3．後の沼田町の開墾伐木作業

（沼田町郷土資料館提供）

写真4．町名になった沼田喜三郎

表2．村名改称の北海道長官の告示

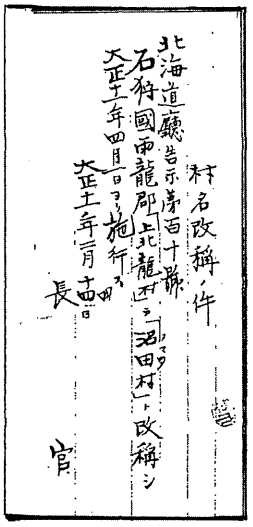

村名改称ノ件
北海道廳告示第百十號
石狩國雨龍郡上北龍村ヲ「沼田村」ト改稱シ
大正十年四月一日ヨリ施行ス
大正十年三月十四日
長官

図4．沼田町位置図

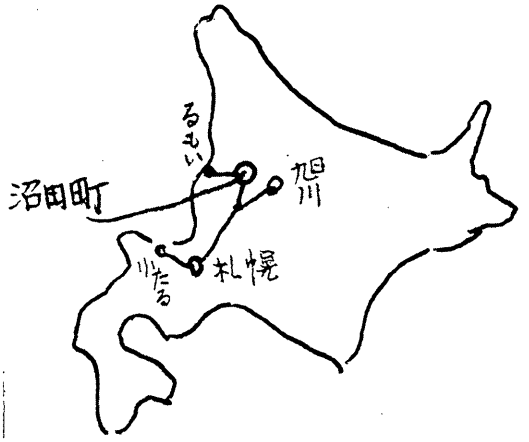
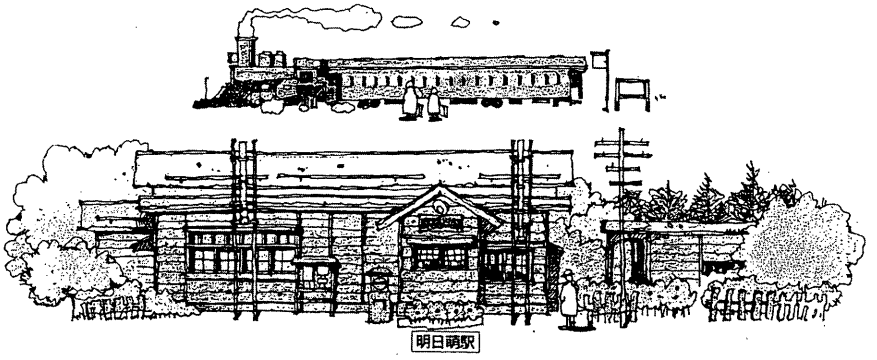


図5．NHKドラマ「すずらん」の舞台となった沼田町　明日萌(あしたもえ)駅



た開墾地は3千ヘクタールという広大なもので，その三分の二の開墾をした。富山・石川県から400戸の農民を受け入れ，開墾地は5ヘクタールにつき，300円から500円で分譲した。沼田喜三郎も400ヘクタールを取得した。その後も開墾を続け，彼の夢は稲作栽培にあって大規模灌漑事業を起したが，大水害や稲作技術の未熟から失敗した。多額の借財を一身に背負って処理し，地域の捨て石となった。沼田喜三郎は私利私欲の念が薄く子孫に美田を残そうとしなかった。

明治39年（1906），国鉄留萌線の建設が始まると喜三郎は鉄道敷地として5千坪，駅前市街用地として2万4,300坪の土地を無償で提供した。国鉄は喜三郎の功績を讃えて駅名を「石狩沼田駅」と決定した。個人の名をつけた駅として唯一のものであろう。

また，大正11年(1922)に北海道庁は村民の強い意を受けて，それまでの「上北龍村」を開拓者沼田喜三郎に対する感謝と尊敬を込めて「沼田村」(現沼田町）と命名した。

参　考　文　献

北陸農民の関東東北移民　竹内慎一郎　(昭和37年)
富山県史通史編Ⅳ　近世下　(昭和58年)
人づくり風土記　16富山　(1993年)
富山歴史館　(2001年)
富山県史通史編Ⅴ　近代上　(昭和56年)
北海道移民政策史　安田泰次郎　(昭和16年)
沼田町史
越中人　譚　第37号　沼田喜三郎　前田英雄　(平成13年)